

ヤスパースの「哲学的信仰」について

——暗号 (Chiffer) とマヤー (maya) の解釈を

手がかりとして——

羽 入 佐和子

序

「哲学的信仰」という概念は、ヤスパースの哲学を特徴づけている一つ概念である。しかし一般的に言えば、論理的客観性を基礎とする学としての「哲学」と、主観性を重視する「信仰」とは本来このように直接に結びつけて使用できる概念ではないはずであり、むしろ両者は明確に区別されるべき関係にあるといえよう。ところが、ヤスパースは「哲学」と「信仰」という二つの概念を結びつけて、「哲学的信仰」という用語を用いる。ただし、このことはヤスパースが自らの哲学を「信仰」として主観的な形で主張しようとしたことを意味してはいない。なぜなら、彼はこの「哲学的信仰」と並行的に「哲学的論理学」をも展開しており、

そこでは、自らの哲学を一つの「論理学」として客観的に語ることに力を尽くしてもいるからである。即ち、ヤスパースは、一方で哲学の論理性を追求しながら、同時に、敢えて「哲学」と「信仰」とを自らの哲学の中で結びつけ、「哲学的信仰」という表現で独自の哲学を表明したといえるのである。そこで、この点に着目して、ヤスパースの「哲学的信仰」の意味を探ることをこの小論のテーマとして、次の手順で考察していくこととする。

一 ヤスパース自身は「哲学的信仰」をどのように考えていたかを概観し、併せて、この場合の主要概念である「暗号」の意味を確認する。

二 ヤスパース自身が「暗号」との関わりで論じているインド哲学の概念「マヤー」について、それを彼がどのように解釈

したかを手がかりに、「暗号」の意味を再検討する。

三 以上の考察を通して、ヤスパースの「哲学的信仰」の哲学としての独自性について明らかにする。

一 哲学的信仰について

ヤスパースが主張した哲学的信仰は、次の二点を主たる内容としていることができるであろう。つまり、第一に、哲学的信仰は「思惟する人間の信仰 (der Glaube des denkenden Menschen)」であり、知と結びついていることを常に特徴としている (GO S. 13) という点、第二には、この信仰が、「実存の行為であり、そこにおいて超越者がその現実性において意識される」 (GO S. 20) ということである。ただし、この第二の点すなわち、「超越者がその現実性において意識される」ということは、実存にとって、超越者が「いま」「ここ」において生き生きと覚知されるという意味であり、このことはまさに、哲学的信仰が「信仰」と名づけられるゆえんであると考えられる。従って、「哲学」を「信仰」と結びつけることの意味を探るには、第一の点、つまり、「思惟する人間の信仰」はいかなる意味で可能なのか、それが何故「知」と結びつくのかを明確にする必要がある。なぜなら、この表現の内にこそ、「信仰」が「哲学」として語られることの意味が集約されていると考えられるからである。そして、この表現の意味するところを解明するために、まず、ヤスパースが哲学的信仰の中

心概念の一つとした「暗号」に着目するのが有効であろう。

ヤスパースは暗号について次のように語っている。すなわち、「暗号において我々は超越者へと思惟してゆき、超越者の言葉を聴く」 (GO S. 15)、「暗号は普遍的な経験や検証とは無縁であり、実存と関係するところに暗号の真理がある」 (ibid.) と。

ここに記されていることは、暗号は「超越者の言葉」であり、超越者への「思惟」が暗号においてなされること、しかも、その暗号は実存によってのみ聴き取られ得るということである。換言すれば、暗号は、「超越者」というそれ自身は経験的認識の対象となり得ない存在と、この存在を「思惟する」実存との媒介の役割を果たしているといえる。従って、超越者を「思惟する」とは、実存が暗号と触れ合うことにはかならないのであるが、そのためには、さらに、暗号は常に浮動的でなければならないことが同時に強調されている。つまり、ヤスパースは、「人間は世界のどこにあっても超越者の浮動する多様な暗号を聴き、見、考えるが、それは決して神そのものではなく、一つの言葉に過ぎない」 (GO S. 15) と語り、実在する人物や事物を超越者の現れと見なすことを拒否するばかりでなく、特定の理念や観念や概念でさえ、超越者をそのまま頭わにはし得ないと考えている。彼によれば、そのような捉え方は超越者の固定化となり、そこで、暗号は「浮動する暗号」でなければならないといわれるのである。

ところで、ヤスパースがこのように「暗号」を特に浮動的に捉

えようとした背後には、「暗号」によって自らの哲学と啓示信仰との違いを強調しようとする意図があったといえるが、それは、例えば、「超越者があらゆる他の実在性と区別された世界の中の神的実在性として、あるいは、時空と結びついた神的啓示として、何等かの特異な形態を見だし得るようなことはここでは表象も思惟もされ得ない」(PGO S. 16c)という表現で、超越者が「暗号」において語られることと「啓示」とを区別し、あるいは、啓示信仰が、「それ自身で満ち足りており、その実在性を基盤として、救済という形で完結する」(PGO S. 16b)という点で、その根本的な形態において哲学的信仰と啓示信仰とは明確に異なると主張されていることにも顕わである。そしてそのためには、暗号は「浮動する暗号」でなければならぬと考えられているのである。

以上の考察から明らかなことは、ヤスパースの哲学において、暗号は「超越者の言葉」として超越者を指示するのではあるが、それは、あくまでも実存が超越者を「思惟」する際に、実存と超越者との媒介となるということであり、それはまた、暗号が浮動するものとして捉えられることによつてのみ可能になるということである。そして、このような思惟にとつてのみ、暗号は、「いま」「ここ」において「超越者の言葉」たり得るのである。

しかし、思惟するものにとつて、暗号はどのように超越者の言葉たり得るのであろうか。また、ヤスパースは、哲学的信仰を

「知」と結びつけても表現しているが、暗号を介した思惟が「知」と結びつくということの意味は何か。これらの点に關してその理解の手がかりを、次に、ヤスパースのマールヤー解釈に求めることにしよう。

二 マールヤーについて

ところで、ここで暗号との関連で「マールヤー」というインド哲学の概念に注目する理由は、ヤスパースが「哲学的信仰」の概念を確立していった時期が、彼自身、インド哲学に注目し、その思想を受容していた時期に当たること、さらに、より積極的には、ヤスパースが、「インドにおいてほど決定的に暗号が経験された思想はどこにもない」(PGO S. 16c)と指摘していることにも拠る。

しかも、インドの思想の中でも特に「マールヤー」は彼の哲学的問題意識と深く関わっているといえるのである。そしてそれは、彼がバーゼル大学での最終講義において次のように語っていることに最も顕著に現われている。すなわち、「あらゆる合理的な説明は、本来的に存在するものは何か、という問いに当たって挫折します。その場合、私は次のようなインドの思想を示すことで結びとしました。このインドの思想というのは、私たちはこの世界の内で生き、そして生活してはいますが、この世界全体は一大仮象であり、マールヤーのヴェールであり……(以下略……)」(CT, S. 20)と。つまり、ヤスパースは、合理的思惟の挫折において語り

得ることとして、世界全体がマールヤーのヴェールであるという考え方に注目したのである。

さて、マールヤーは、例えば『リグ・ヴェーダ』では、「悪魔のたくらみ」、「善なる神性」、「神秘的力」を意味していたが、ウパニシャッドでは、このような神秘的色彩を弱め、「宇宙的幻想」として現象界の仮象性を示す語となった。そこでは、諸現象を真の存在と見なす事態を「無知(avidyā)」と呼ぶが、ヴェーダーンタ哲学では、この「無知」それ自体がむしろ一つの力として積極的な意味を持つようになり、そこで、マールヤーはブラフマン(Brahman)という真なる存在を隠すかのように諸々の幻を創造する力を意味した。また、仏教においては、マールヤーは空性(sūnyatā)を示す比喩の一つとみなされてもいる。

ここでウパニシャッドのマールヤーの解釈の一例をあげておこう。例えば、「音」を考えてみると、「音」はそれ自体で認識されるのではなく、それが音として認識される時には「一つの音の塊」として聴かれるに過ぎず、真に存在するものは「未だ聴かれざるもの」としての「音」であるという解釈がある。すなわち、マールヤーの幻想に捉われている限り、現象を真に存在するものとみなす点では「無知」であるが、マールヤーが真に存在するものを隠蔽しているということが逆に、この「無知」を突破させ、真の知へ向かうことを可能にするという考え方であり、その時、マールヤーはいずれへともなく消え去ることによって、存在そのものを顕

わにすると考えられているのである。

「マールヤー」をこのように理解した場合、第一に、世界内に存在するものはマールヤーであること、第二に、これを真の存在と見なすことは「無知」を意味すること、第三に、この「無知」は「知」への意識を駆り立て、真の存在への覚醒を可能にするものであること、の三点をその特性としているといえよう。

他方、ヤスパースはマールヤーの意味を、特にウパニシャッドにおける意味に則して次のように解釈している。つまり、「世界内での知、世界内における対象に関する知、合目的な行為における知はまさに無知であり、マールヤーのヴェールである」(PoS, 410)。また、「マールヤーの内にある我々の現存在から見れば無であるものが、まさしく真理であり充実なのである……(中略)……対象的な明白さ(Hellikeit)や合理的な明晰さ(Klarheit)によっては隠蔽がまずばかりである」(Ibid.)と。つまり、ヤスパースは、世界現象をマールヤーと見なすこと、即ち、マールヤーの幻惑からの解放であり、「無知」からの解放であると理解しているのである。

ヤスパースのこのようなマールヤー解釈は、彼のいう「暗号」と対比させてみると、次の点において両者の類似性が確認できる。

まず第一に、マールヤーが真の存在から発すると理解された点では、超越者の言葉としての暗号と一致するといえる。また、第二に、マールヤーのもたらす「無知」を見抜くものに向かって、マールヤーは、自らが消え去ることによって存在そのものを顕わにするとい

う点では、実存の主体的な思惟に対して、超越者を覚知させる暗号と、その働きにおいて同じであるといえる。しかも、第三に、現象としてのマヤーは、真の存在に対して、その時々幻影であり、いわば浮動的にのみ考えられることにも、ヤスパースのいう暗号が「いま」「ここ」において超越者を語ることとの類似を認めてよいであろう。

ところで、暗号は、思惟するものにとつてどの様に超越者の言葉たりうるのか。暗号が浮動するものと捉えられるということは、どのように解釈できるのであろうか。マヤーは、「無知」を見抜くものに対して真の存在を顕わにするとヤスパースも解釈している。しかもその際に、マヤーは、自らがいずれへともなく消え去ることによって、存在そのものを顕わにするということを顧慮するとき、この場合に、「無知」を見抜くものとマヤーと真の存在という三者の関係は、暗号を超越者の言葉として聴き取る実存と暗号と超越者との三者の関係に対応させることができるであらう。そして、マヤーを介するこれらの関係の内に、思惟する実存にとつての超越者の言葉の一つのあり方を認め得ると解釈できるであらう。

また、「思惟」という側面について考えると、マヤーが「無知」を意識させ、真の存在の「知」をもたらしするという事態は、ヤスパースの言い方に拠れば、「思想も対象も崩壊し、無に帰するが、そのことによって、本来的で、本質的で、それ自身で存在す

るものが現実的となる」(Prosa II)という表現に対応するであらう。そして、このように表現される事態こそ、ヤスパースにおいて、超越者へと「思惟する」ということの意味であり、この表現をさらに、先の、「マヤーの内にある我々の現存在からみて無であるものが、それ自身真理であり充実である」(Prosa II)という言い方と考え合わせるとき、本来「無であるもの」への「思惟」がマヤーを介して可能となる、と理解されていることが明らかとなる。

このように、ヤスパースのマヤー解釈を手がかりとすると、次のことが確認できるのであろう。すなわち、現象としては実在せず、むしろ「無であるもの」は、暗号を介して「思惟する」際にのみ超越者を現実的にするのであり、それは、マヤーが「無知」を意識させ「知」をもたらしという考え方に対応し、そのことが、「思惟する人間の信仰」の意味をなしているということである。また、この意味で、「思惟する人間の信仰」は「知」と結びつくとも言われるのである。そして、それ故にこそ、ヤスパースは「インドにおいてほど決定的に暗号が経験された思想となつたところはない」というのであろう。

そこでさらに、以上の理解に基づいて、暗号を媒介として超越者への思惟を可能にすると考えられた「哲学的信仰」について改めて考察しておきたい。

三 「存在」の探求としての「哲学的信仰」

ヤスパースの哲学的関心は一貫して「存在」に向けられていた。この点においては、ヤスパースを他の哲学者から区別することは難しいであろう。また、この「存在」を、「哲学的信仰」という思想の中で、「超越者」や「神」と言い替えたことも、彼の思想を特徴づけているとはいえない。しかし、ただ一つ、ヤスパースが、対象性を越えたこのような「存在」に対して、「暗号」という視点からアプローチを試みた点に、彼の哲学の特異性が認められるといえるのではないだろうか。

ヤスパースにとって、「暗号」は、論理性や客観性を追求する哲学においては非対象的なものとして不問にされ、むしろ、宗教的「可能にする概念であった。「暗号は自らを超えて事物の根拠を指示する。それは、*Sein*、*Nichts*、*Sein-Nichts*、*Uebersein*、*vor allem Sein*」と呼ばれ、何千年来、哲学することの内言及されてきた」(PGS.210)と語っていることにも明らかのように、ヤスパースは、「存在」をめぐるこれらの表現をも一つの暗号と見なすことによって、存在の根拠へと近づくことが可能であると考えたのである。

哲学の関心は、一般的に、「存在しているもの」から「存在そのもの」へと向かうと考えられる。しかも、哲学という学におい

ては論理性や客観性を欠き得ない限り、常に、言語化することが求められている。しかし、他方、哲学の対象としての「存在そのもの」はどこまでも言語化不可能なものである。すなわち、哲学はそれ自身の内に、言語化し得ないものに言語化を求めるという矛盾を含んでいるともいえる。そして、哲学のもつこの矛盾にヤスパースは敢えて挑戦したのである。ただし、そのように言語化し得ないものへの接近は、ややもすれば独断的になり、哲学という学問の領域から逸脱しかねない。それにも拘らず、ヤスパースは、「暗号」を媒介とすることによって、哲学の内にとどまり、一貫して、思惟の過程において存在そのものに迫り得ると主張したのである。換言すれば、暗号を聴き取ることを哲学の思惟とし、このようにして、言語化し得ない「存在そのもの」へ至る最終の道を示そうと試みたと言えるであろう。

「暗号」の解釈を通して理解される哲学的信仰は、啓示信仰と客観的認識とに面しながらも、そのいずれにも場を譲ることなく、あくまでも「思惟」によって「存在」を探求することを目指している。それは、「宗教と無神性に面して哲学するものは、自己固有の信仰から生きようとする」(WES.114)という表現にも明らかであり、こうしてヤスパースは、本来それ自身いかなる言語化も概念化も拒否する「存在」を、「思惟する人間の信仰」において、「暗号」を手がかりにして「思惟」の対象となしたのである。そして、このような「存在」への探求は、「思惟する人間の信仰」

としてまさに「哲学的信仰」と呼ばざるを得ないものであったといえるであろう。

以上、ヤスパースの「哲学的信仰」の特殊性を「思惟する人間の信仰」と捉え、哲学的信仰における「思惟」を中心に考察してきたのであるが、この小論は哲学的信仰の独自性の一端を示したに過ぎず、その意義をより明確に論証するためには、「暗号」と並んで哲学的信仰の主要概念である「包越者 (das Umgreifende)」の意味の解明をはじめ、マールと暗号との詳細な比較検討の過程も示さなければならぬが、これらに関しては別の機会に譲ることとする。

*ヤスパースの著作からの引用注は文中に記し、その際の略号は次の通りである。

CT Chiffren der Transzendenz, München, 1970.

PGO Der philosophische Glaube angesichts der Offenbarung, München, 1962.

VE Vernunft und Existenz, 1935, 5. Aufl., München, 1973.

(1) 「哲学的信仰」という概念は、『理性と実存』(一九三五年)で述べられて以来、『哲学的信仰』(一九四八年)、『啓示に面しての哲学的信仰』(一九六二年)で論及されているが、ここでは、暗号論との関連から、『啓示に面しての哲学的信仰』に拠ってこの概念の意味を解釈した。

(2) ヤスパースの「超越者」については、啓示信仰との関係と並んで、神秘主義的要素が問題になるが、例えば、田丸徳善氏が指摘してい

るように、ヤスパースの場合は神秘主義的な現実の世界からの逃避ではないと筆者も理解している。(田丸徳善「哲学的信仰」について」峰島旭雄篇『ヤスパース 哲学的信仰の哲学』所収、以文社、一九七八年、二八ページ・三四ページ参照)

また、Sören Holm は、ヤスパースの哲学的信仰をむしろ「宗教哲学」と解釈している。(Sören Holm, Jaspers' Religionsphilosophie, in P. A. Schilpp, hrsg., Karl Jaspers, 1957.)

従って、ヤスパースの「哲学的信仰」は、啓示信仰や神秘主義との関連で、そしてさらには、宗教哲学の問題としても検討を要するのであるが、これらの点に関する論及は別の機会に譲る。

(3) マールに関するこの解釈は、P. Deussen が「Chândogya-Upanisad VI, 1, 2^a. "Bṛhadāranyaka-Upanisad, II, 4, 6" について論じたのである」(P. Deussen, Die Philosophie der Upanishads, 1922, S. 41, S. 209 f.)

(はにゅう・ちわこ「哲学」お茶の水女子大学専任講師)